

症 例 報 告

下顎切歯部にみられた過剰歯の1例

戸塚 盛雄* 小川 光一* 福田 容子*
小野 実**

岩手医科大学歯学部歯科予診室* (主任：戸塚盛雄教授)
岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座** (主任：関山三郎教授)

〔受付：1984年5月15日〕

抄録：19才女性の下顎切歯部過剰歯の1例を経験した。過剰歯は定型的切歯の形態で、1]と3]の間の歯列内に位置していた。口腔内X線写真にて歯根の異常はなかった。

Key words : tooth, supernumerary.

緒 言

日常の歯科臨床において、歯数の異常に遭遇することがある。歯数異常には歯数過多と歯数不足とがあり、歯数過多の発現頻度は歯数不足に比し一般に少ないとされている¹⁾²⁾。過剰歯の好発部位について、Stafne³⁾、佐藤⁴⁾、は上顎前歯部が最も多く、次いで上顎大臼歯部で、下顎前歯部の頻度は少ないとしている。藤田(1958)⁵⁾は過剰側切歯は上下顎とも切歯部に現れるが、完全形を具えたものの頻度は極めて小さく、その都度1例報告をする価値があると述べており、出現が非常にまれであることが理解される。

今回われわれは19才女性の下顎前歯部に定型的切歯過剰歯を認めたので報告する。

症 例

患者名：○谷○子，19才，女子学生

初診：昭和58年7月12日

主訴：18部の疼痛

家族歴：母親が急性肝炎にて入院加療中，父親は健在，同胞はなく，家族内に歯数異常者はいない。

既往歴：帝王切開にて誕生，生下時体重，3,500g，3才頃より発熱を生じやすく，あまり丈夫でなかった。小学生頃まで卵を接取することによりストロフルスを生じた。昨年3月8]を局所麻酔下で抜歯，抜歯1時間後より気分が悪くなったことがある。その他に特記すべき事項はない。

全身所見：身長156cm，体重51kgで，体格，栄養状態ともに中等度である。

口腔外所見：左頬部にび慢性腫脹と圧痛を生じている。

顎下リンパ節所見：両側に大豆大のリンパ節を触知，ともに可動性で，左側には圧痛があり，右側には圧痛がない。

A case of supernumerary tooth in lower anterior region

Morio Totsuka*, Koichi Ogawa*, Yohko Fukuta* and Minoru Ono**

(Department of Oral Diagnosis, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka, 020)

(Department of Oral Surgery II, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka, 020)

*, **岩手県盛岡市中央通1-3-27 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 9 : 118-127, 1984

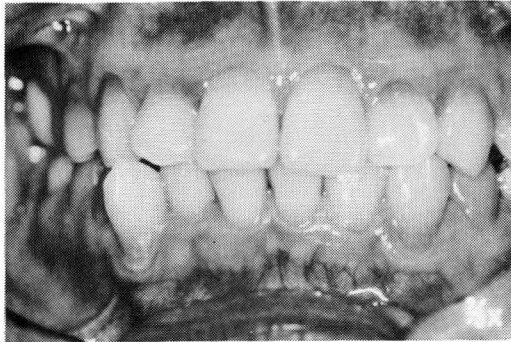


図1 口腔内写真, 閉口時

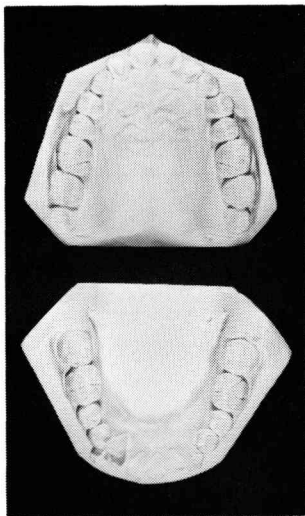


図2 上下顎歯列模型

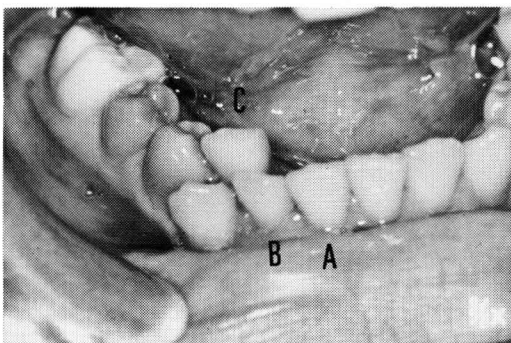


図3 口腔内写真, 下顎前歯部

口腔内所見：口腔内清掃状態は概ね良好。

歯牙所見： $\overline{8}$ は半埋伏で、近心咬頭の一部が萌出しており、同歯牙の頰側粘膜に軽度の発赤、圧痛を伴っていた。 $\overline{7}$ にアマルガム充填、



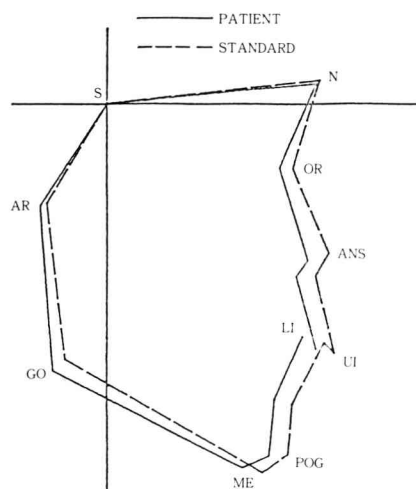
図4 口腔内X線写真

$\overline{7} | \overline{7}$ にメタル・インレーがなされており、 $\overline{7}$ に二次カリエスを生じていた。 $\overline{543} | \overline{345}$ の歯冠歯頸側の約 $\frac{1}{3}$ に黄色の帯状の着色があり、 $\overline{6} | \overline{6}$ と、過剰歯を含む下顎前歯の歯冠歯頸部にも線状の着色が認められた。

咬合関係および歯列弓：左右とも Angle I 級で、咬合状態は緊密で、前歯部の被蓋は ovre

表1 ROENTOGEN CEPHALOMETRIC ANALYSIS PROFILOGRAM (FEMALE)

AGE 19Y



(STANDARD : BY SAKAMOTO)

bite 2.8mm, over jet 5.2mm(図1),上顎歯列弓(図2)はほぼ正常な形で,下顎歯列弓は3が唇側転位しており,犬歯のみ反対咬合の状態,上顎正中に対し下顎正中が右側に1mm

偏位(図1)している。下顎両犬歯間に4本の切歯があり,さらに3の舌側に切歯を認め,咬耗が著明で,叢生状態(図3)を示している。5本の歯牙はいずれも色調,形態は切歯に類似,

表2 ROENTGEN CEPHALOMETRIC ANALYSIS (Female-Adults)

	Mean	S.D.		PATIENT
FH to SN plane	6.19	2.89		5.37
Facial angle	84.83	3.05		82.69
Y-axis	65.38	5.63		67.26
Convexity	7.58	4.95		3.31
A-B plane	-4.81	3.50		-3.05
SNA	82.32	3.45		78.91
SNB	78.90	3.45		77.11
SNA-SNB diff.	3.37	1.77		1.81
Mandibular plane	28.81	5.23		25.43
Gonial angle	122.23	4.61		117.70
Ramus inclination	2.93	4.40		2.27
Occlusal plane	11.42	3.64		8.48
Interincisal	124.09	7.63		117.58
U-1 SN plane	104.54	5.55		113.68
U-1 to FH plane	111.13	5.54		117.98
L-1 to Occlusal	23.84	5.28		25.06
L-1 to Mandibular (degree) (Standard: by Iizuka-Ishikawa)	96.33	5.78		99.08
N-S	68.43	2.42		66.91
A'-Ptm'	48.33	2.52		48.48
Ptm'-Ms'	19.22	2.88		23.63
A'-Ms'	26.92	2.54		24.85
U-1 to A-P plane	8.92	1.88		9.9
U-1 to N-P plane	11.74	2.73		10.4
Gn-Cd	119.33	4.43		115.49
Pog'-Go	77.20	3.83		73.46
Cd-Go (mm) (Standard: by Sakamoto-Miura-Iizuka)	62.35	4.88		64.07

下唇小帯の位置より左側に歯数の異常はないと判断した。

X線所見：口腔内X線写真(図4)では、5本の下顎切歯いずれも、歯根形成の異常もなく、正常の形態を備えている。パノラマX線写真において、下顎前歯部以外に過剰歯は認められない。

頭部X線規格写真分析(表1, 表2)：ほとんどの計測項目において、Skeletal patternの範囲ではほぼ正常で、U-1 to SN planeの角度が113.68°と上顎切歯の前方傾斜を示した。

歯牙・歯列弓・Basal Archの大きさ(表3)：過剰歯を除き測定したが、いずれの測定値も正常範囲内である。

表3 歯・歯列弓・Basal Archの大きさ(mm)

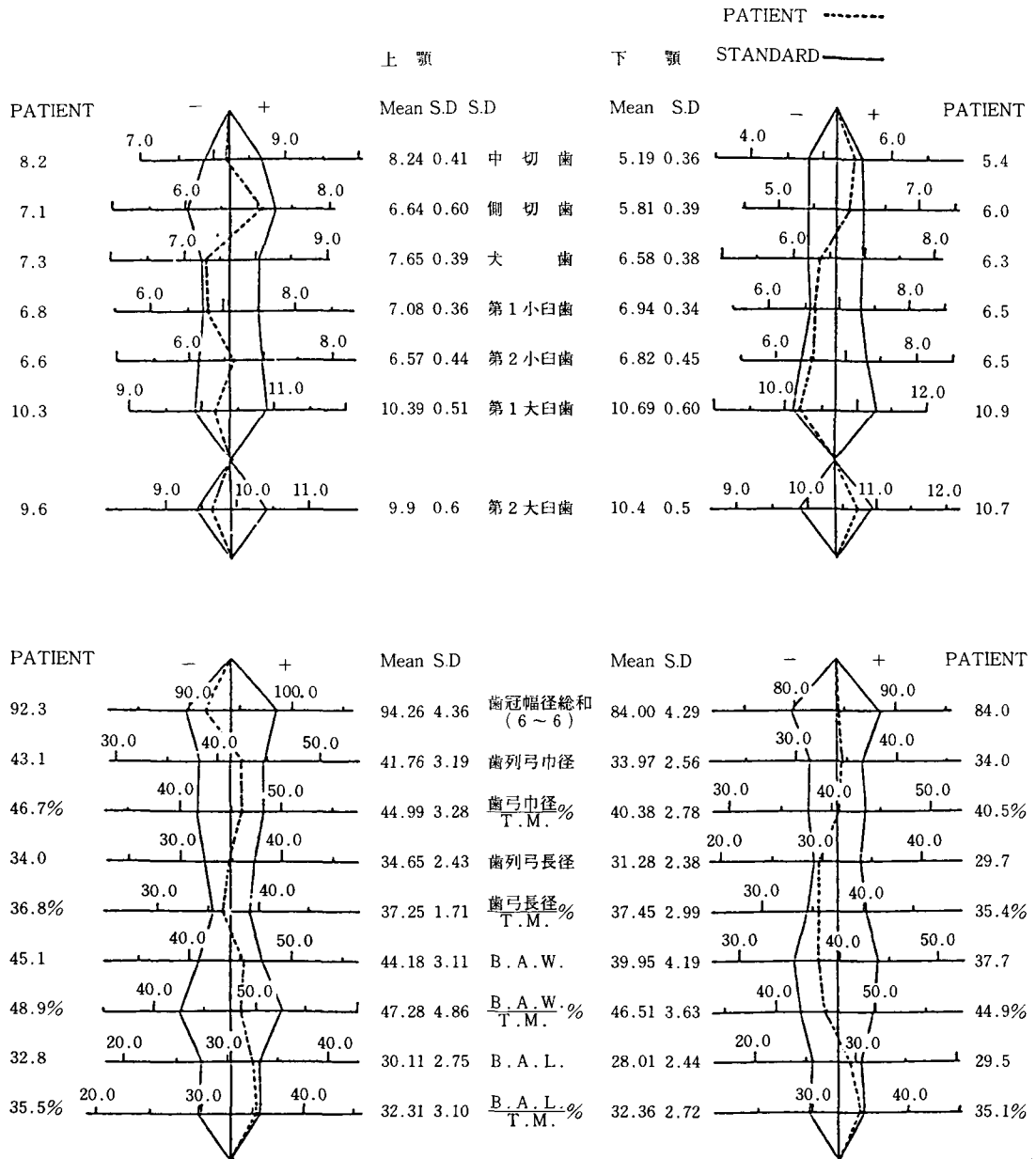


表4 切歯の計測値 (mm)

部位	歯牙				
	C	B	A	1	2
歯冠長					
	(7.0)	6.1	8.0	8.0	8.1
唇側					
舌側	8.2	6.7	8.0	8.0	8.1
歯冠の幅	6.0	5.1	5.3	5.4	6.0
歯冠の厚み	(6.0)	5.0	5.9	5.9	5.9

() 内は抜去歯の計測値

処置：1の近心に隣接している歯牙は、顎骨内の植立状態も良好で、歯列内にはほぼ位置していることより保存することにし、舌に強く接触するとの患者の訴えもあり、1の舌側に位置している歯牙を抜去した。

石膏模型上および抜去歯牙の計測：便宜上1に隣接する歯牙をA、1の近心に位置する歯牙をB、1の舌側に位置する歯牙をC(図3)として実測した。歯冠長は舌側および唇側歯頸部より切縁までの長さとし、歯冠の厚みについては、唇舌的歯頸部での厚さとし、抜去したCについては解剖学的歯頸部を、歯冠の厚みは最大豊隆部を測定した。計測値の結果は表4の如くであった。測定値よりAと1とが類似し、Cと2とが類似していた。Bは歯冠幅が5切歯の中で最小値を示し、過剰歯と判断した。

考 察

1 過剰歯の発現部位と頻度

過剰歯は乳歯より永久歯に多くみられ、Stafne (1932)³⁾ は48,550名のX線写真を観察し、441名500歯について報告、上顎切歯部が246歯(49.2%)で最も多く、次いで上顎大臼歯部が189(37.8%)、以下下顎小臼歯が32歯(6.4%)、下顎大臼歯部と下顎切歯部が共に10歯(2.0%)、上顎小臼歯部9歯(1.8%)、上顎犬歯部2歯、下顎犬歯部1歯の順であった。佐藤¹⁾ が1894年より1936年までの本邦における過剰歯報告例と自験例を合せ、過剰歯例474名529歯について報告し、それによると上顎前歯部が最も多く、以下上顎臼歯部、下顎臼歯部、下顎前歯部の順で、下顎前歯部は最も少なかった。

2 下顎切歯部過剰歯の頻度

今村⁵⁾ は、29,764名中下顎に過剰歯を有するもの3名、うち下顎切歯部にみられた1例(0.003%)を報告、脇屋⁶⁾ は、5,230名中下顎過剰歯を有するもの3名、うち切歯部2例(0.038%)、岡本⁷⁾ は15年間に一般外来患者81,231名中下顎過剰歯を有するもの16名、うち切歯部3例(0.004%)を報告、川島⁸⁾、住谷⁹⁾ は下顎切歯部過剰歯は1例もみられなかったとしている。

3 下顎切歯部過剰歯報告例

本邦における下顎切歯部過剰歯に関する報告は今村(1926)⁵⁾ を始めとし、多数の報告があり、阿保¹⁰⁾、小椋¹¹⁾、沢¹²⁾、多田¹³⁾らが従来の下顎切歯部過剰歯の報告をまとめ検討している。われわれが狩猟し得た範囲で、永久歯の下顎切歯部過剰歯報告例を、解剖学的定型例(表5)と非定型例(表6)に大別しまとめた。下顎前歯部を含む多数の過剰歯例や、鎖骨頭蓋異骨症などの症候群は除いた。定型例は本報告例を含め33例、非定型例は21例であった。非定型例のNo.17花岡¹⁴⁾らの報告例は、過剰歯の形態が不明のため非定型例とした。下顎切歯部過剰歯を定型、非定型例別にそれぞれ性別、左右側別、発現部位別例数をまとめると表7の如くである。

性別：過剰歯の性別発生頻度について、佐藤¹⁾、宇賀¹⁷⁾は、男性が女性の4倍をせめしていると報告、下顎切歯部過剰歯例では、定型例で男性18例、女性14例、非定型例で男性9例、女性8例で性差はなかった。過剰歯が両側にある場合、定型例のNo.8、No.13、No.20はいずれも女性であり、また乳歯の下顎前歯部両側過剰歯例⁴³⁾⁴⁴⁾⁴⁵⁾も女性であることは興味深いことである。

左右別：定型例において右側10例、左側7例、非定型例では右側10例、左側4例とやや右側に多い傾向であった。正中部に位置する過剰歯では、定型例33例中13例(39.4%)、非定型例21例中4例(19.0%)と、定型例における割合が高かった。

表5 本邦における下顎切歯部の定型的過剰歯の報告例

No.	報告者	発表年	性	年齢	左右側	部位	形態及びその他
1	今村 汎 ⁵⁾	1926	不明	不明	右	32 の舌側	側切歯様
2	楠 国 雄 ¹⁴⁾	1931	女	11	右	C 2 の舌側	側切歯形
3	〃	〃	女	49	左	23 間, 歯列内	側切歯形
4	松本 一 男 ¹⁵⁾	1933	男	36	正中(左)	1 1 間, 歯列内	側切歯形
5	松村 晋 ¹⁶⁾	1934	女	21	正 中	1 1 間, 歯列内	解剖学的形態
6	〃	〃	男	13	正 中	1 1 間, 歯列内	解剖学的に近い形態 1 1 間に円錐形過剰歯
7	宇賀 春 雄 ¹⁷⁾	1934	男	22	左	23 の舌側	切 歯 形
8	遠藤 至六郎 ¹⁸⁾	1938	女	24	左 右	32 , 23 の舌側	切 歯 形 左右各1歯
9	脇屋 和 夫 ⁶⁾	1940	男	12	右	32 間, 歯列内	切 歯 形
10	東郷 満 輔 ¹⁹⁾	1940	男	19	正中(右)	1 1 間, 歯列内	切 歯 形
11	阿保 喜七郎 ¹⁰⁾	1941	男	20	正 中	1 1 間, 歯列内	切 歯 形
12	岸本 正 ²⁰⁾	1952	男	25	正 中	1 1 間, 歯列内	類側切歯, 1 1 間に紡錘状過剰歯
13	今井 茂 ²¹⁾	1952	女	18	左 右	32 の舌側, 23 の唇側	側切歯形 左右各1歯
14	服部 左 門 ²²⁾	1959	女	不明	正 中	1 1 間, 歯列内	正 常 型
15	吉岡 敏 雄 ²³⁾	1960	男	12	右	2 の舌側	側切歯形
16	山崎 裕 ²⁴⁾	1961	女	13	正 中	1 1 間, 歯列内	切歯形, 1家族8人中5人に過剰歯
17	岡本 治 ⁷⁾	1963	男	14	右	31 の舌側または歯列内	側切歯形
18	〃	〃	男	53	左	134の舌側または歯列内	切 歯 形
19	〃	〃	男	19	左	2 の舌側	側切歯形
20	尾崎 公 ²⁵⁾	1966	女	18	左 右	32 の歯列内 13 の舌側または歯列内	右: 側切歯3歯, 左: 側切歯3歯癒合
21	小椋 正 ¹¹⁾	1968	男	8	正中(右)	1 1 間, 歯列内	切 歯 様
22	山野智要之亮 ²⁶⁾	1969	男	9	左	2 C の舌側	完全側切歯形
23	沢 秀一郎 ¹²⁾	1978	女	7	右	21 間, 歯列内	切 歯 形
24	〃	〃	女	7	右	21 の舌側	切 歯 形
25	〃	〃	女	9	右	21 間, 歯列内	切 歯 形 左唇顎口蓋裂
26	〃	〃	男	10	正中(左)	1 1 間, 歯列内	切 歯 形
27	白川 正 順 ²⁷⁾	1979	女	26	正 中	1 1 間, 歯列内	中切歯形
28	金子 昌 幸 ²⁸⁾	1980	男	7	右	21 間, 歯列内	側切歯形
29	五十嵐 東 ²⁹⁾	1980	男	60	正中(左)	1 1 間, 歯列内	中切歯形
30	多田 逸 ¹³⁾	1980	男	22	正中(右)	1 1 間, 歯列内	切 歯 形
31	岡本 治 ³⁰⁾	1981	男	32	左	23 の唇側	側切歯形
32	〃	〃	女	8	左	1 C の舌側または歯列内	側切歯形
33	本 症 例	1984	女	19	右	31 間, 歯列内	切 歯 形

表6 本邦における下顎切歯部の非定型的過剰歯の報告例

No.	報告者	発表年	性	年齢	左右側	部	位	形態及びその他	
1	大橋平治郎 ³¹⁾	1932	男	30	右	3	の舌側	円錐形または類犬歯形, 歯牙全長8.5mm	
2	〃	〃	男	24	右	2	の舌側	切歯形, 歯牙全長6.5mm	
3	江沢清 ³²⁾	1937	女	28	右	32	の歯根間	2歯の1歯: 歯冠部扁平 過剰埋伏 1歯: 多咬頭の歯冠のみ	
4	福島玄一 ³³⁾	1937	女	31	左	23	の舌側	3歯の過剰歯, 円錐形癒合過剰歯	
5	遠藤至六郎 ¹⁸⁾	1938	男	28	右	32	の舌側	犬歯に近い形状	
6	〃	〃	男	45	右	21	間	米粒大	
7	〃	〃	男	35	右	21	間	米粒大	
8	〃	〃	不明	不明	不明	1	付近の唇側	小過剰歯	
9	今村汎 ³⁴⁾	1939	女	16	正中	11	間	球状埋伏	
10	脇屋和夫 ⁶⁾	1940	男	21	右	32	間, 歯根端	2歯の過剰埋伏とともに円錐形	
11	上尾登 ³⁵⁾	1941	男	40	右	32	の舌側	円錐形腫患者	
12	山田茂 ³⁶⁾	1941	不明	不明	正中	11	間	不明	
13	藤田宗次 ³⁷⁾	1953	女	9	左	2C	間, 歯列内	類円錐形	
14	枡原博 ³⁸⁾	1956	女	8	正中	11	間, 歯列内	円錐形, 6才7ヵ月時 BA 間に乳歯の過剰歯	
15	小林茂夫ら ³⁹⁾	1958	女	22	不明	23	の舌側	円錐歯歯冠長1cm	
16	中村忠文ら ⁴⁰⁾	1968	女	26	左	23	の舌側	米粒大, 歯牙全長9.3mm	
17	花岡宏ら ⁴¹⁾	1972	不明	不明	不明	中切歯部		不明	
18	長縄弘康ら ⁴²⁾	1975	男	7	右	2	と埋伏1	の唇側	単錐形埋伏
19	〃	〃	女	10	右	2	の根尖部, 埋伏1	の切縁上	犬歯形の歯冠のみ埋伏
20	白川正順ら ²⁷⁾	1979	男	27	正中	11	間, 歯列内		棒形, 歯冠長は1の%
21	岡本治ら ³⁰⁾	1981	不明	7	左	2	部		矮小歯, 逆性埋伏

表7 下顎切歯部過剰歯の左右別・性別・発現部位

定型 33例

非定型 21例

		右側	左側	正中部	両側	計
性別	男	4	5	9		18
	女	5	2	4	3	14
	不明	1				1
発現部位	舌側	4	3		3	10
	唇側		1		1	2
	歯列内	5	1	13	1	20
	舌側または歯列内	1	2		1	4

両側症例は2部位として集計

		右側	左側	正中部	不明	計
性別	男	8		1		9
	女	2	3	2	1	8
	不明		1	1	2	4
発現部位	舌側	4	2		1	7
	唇側	1			1	2
	歯列内		1	2		3
	埋伏その他	3	1	1	1	5
		2		1	1	4

発現部位: 定型例では歯列内が20例と過半数をしめ, 非定型例では舌側が7例と最も多くみ

られた。定型例の正中部過剰歯は全例, 歯列内に位置していた。また下顎の唇側に出現した例

は、定型例で2例、非定型例で1例とわずか3例にすぎなかった。

過剰歯の形態：解剖学的形態をもつ定型と、解剖学的形態をもたない非定型に大別^{10, 21, 29)}されているが、われわれは形態だけでなく、歯冠長をも考慮し、解剖学的形態を備えていても、形態が極端に小さいものは非定型とした。また過剰歯との癒合、および双生歯としての報告例については、その発生機序にはっきりした定説もなく、それに伴う定義^{44, 46)}も異なっているので、非定型とも別扱いにした。多田¹³⁾らは下顎前歯部に過剰歯を認めた場合、いずれの歯牙が過剰歯か判断するのに苦労することが多いが、形態異常を有する歯牙が存在すれば、容易に過剰歯とみなすことが出来る。また萌出位置が歯列内外に関係なく解剖学的形態を有する歯牙が存在する場合、その計測値をもって判断材料とし、主として最小値を示すものを過剰歯として述べており、本報告においても、同様に下顎切歯を計測し歯冠が最小値を示した歯牙を過剰歯と判定した。

その他の報告例：過剰歯との癒合歯例や双生歯例、乳歯例、下顎前歯部を含む多数過剰歯例などがある。斎藤⁴⁶⁾ (1959) は本邦における永久歯前歯部における癒合歯例について、1917年から1958年までの報告例および自験例を報告している。それによると下顎中切歯と過剰歯との癒合歯例3例、側切歯との癒合歯例4例があるその他に遠藤¹⁸⁾、今村³⁴⁾、吉岡⁴⁷⁾、相田⁴⁸⁾、服部²²⁾、吉本⁴⁹⁾、尾崎²³⁾が報告している。吉岡の報告例は下顎中切歯と側切歯と過剰歯の3歯が癒合した例であり、尾崎の報告例は定型例(表5)のNo. 20の症例で、左側下顎側切歯3歯が癒合した例である。

乳歯例については、非定型例(表6)のNo. 14、栃原³⁸⁾の報告例があり、6才7カ月時|BA間に乳歯の過剰歯があり、その後8才時に|I|間の歯列内に円錐形過剰歯が存在した例である。その他萩原³⁰⁾、原田⁴³⁾ら、萩田⁴⁴⁾ら、平岡⁴⁵⁾らの報告例がある。乳歯過剰歯としての判定基準について、藤田⁹⁾は次のように述べている。

1) 正常形態を示すこと、2) 過剰歯も歯列上に排列していることであって、そのためどれが過剰歯であるか、どれが正常歯であるかの判定に苦しむことが多いとしている。

特異な例として、堀井⁵¹⁾は19才男性、 \square は先天性欠如で、同部に小さな種々の形態の5個の群生歯例を報告、椿本⁵²⁾らは14才女性、 \square 間に7個の円錐形矮小過剰歯例を報告しており、このように特定の部位に群生したものは複合性歯牙腫との鑑別が必要と思われる。さらに平川⁵³⁾らは13才女性、 \square は埋伏し下顎正中埋伏過剰歯が存在し、両歯牙の歯冠を包埋する歯原性線維腫を報告している。

4 過剰歯の発生原因

過剰歯の発生原因については、種々な説があり、確固たる説がなく多くの論議がなされている。以下主な説として、

1) 系統発生学的な先祖返り(隔世遺伝)⁵⁴⁾：哺乳類の標準歯式 $I \frac{3}{3} C \frac{1}{1} F \frac{4}{4} M \frac{3}{3}$ に近づく先祖返りとする現象として現れる説である。藤田⁵⁵⁾は時として哺乳類の標準歯式を超過した5本以上の小臼歯が発現すること。犬歯にも過剰歯が発現することから、単なる先祖返りでないとしている。

2) 個体発生学的な形成障害^{56, 57)}：何らかの原因で正常歯胚が分裂したか、あるいは正常歯胚とは別に、独立して余計な歯胚が形成されるためである。藤田はこの過形成にも発生しやすい部位と、し難い部位とがあり、大臼歯部、小臼歯部(代生歯堤の末端部)、上顎切歯部は歯牙原基間の間隙が広く、従って過剰形成が起りやすく、これに反し下顎切歯部は上顎に比較して、歯牙原基間の密度が大きいため過剰形成が起りにくいとしている。

3) 組織誘導説²²⁾：過剰歯は正規の歯とは別に、形成体の誘導作用をうけた細胞組織から発生するとしている。周囲構造の変化に対応して不規則現象を表わしたもので、周囲構造に変動の多い部分に出現すると述べている。Moss⁵⁸⁾は歯牙の形成に関し、外胚葉と中胚葉の誘導に4つの因子が関与しており、誘導刺激の強さ、

その持続時間、刺激に対する刺激の反応能力、刺激の特異性をあげており、野坂⁵⁷⁾はこれら4因子が満されて異常誘導として働きかけることによって過剰歯が形成されるとし、正常歯牙と同一発生過程をとると考えている。

いずれの説においても、従来の過剰歯報告例を十分に説明出来ないように思われる。

5 遺伝的影響

過剰歯が家族的に生じる報告は少なく、中村⁵⁹⁾は1家系4代にわたり、生存者31名中5名(男性4名、女性1名)、6歯の過剰上顎正中歯を有している例を報告し、血族結婚の結果、変更遺伝子の集結のため表現力が強くなったとし、深田⁶⁰⁾らは一卵性双生児において、同部位に同じ様な過剰歯が認められた例を報告し、一応遺伝関係が考えられると述べ、吉本⁶¹⁾らは過剰歯出現の由来は不明としながらも、同胞の妹に双生歯を認め、遺伝的因子が作用していると考えており、山崎²⁴⁾は1家族8名中5名(男性2名、女性3名)に正中過剰歯を認め、4名が上顎、1名が下顎正中部に過剰歯を認め、切歯部過剰歯の出現性に遺伝性が考えられ、また上下顎間にも関連性が推定されるとしている。本報告においては、患者以外には家族内に過剰歯

を有している者はおらず、家族的遺伝性については不明である。

6 過剰歯の歯列弓に対する影響

矯正患者を対象として、川島⁸⁾は過剰歯をもつ症例の89.3%が咬合に影響を与えているとし、石川⁶²⁾らは46.2%、花岡⁴¹⁾らは59.4%において、過剰歯により歯列不正の影響があったとしている。石川⁶²⁾らは上顎前歯部の過剰歯のみに関する報告であるが、過剰歯は歯列の不正をおこす原因となり得ても、直接下顎前突や過蓋咬合の原因とはなりえず、偶然そこに過剰歯が存在していたとしている。小椋¹¹⁾ら、沢¹²⁾らは過剰歯が捻転や叢生などの歯列不正に影響を与えているとしている。本報告においては、過剰歯により $\overline{4}$ が唇側に転位し、犬歯のみ反対咬合を生じ、さらに前歯部に叢生状態を呈し、歯列に影響を与えたと考えている。

結 び

19歳女性の下顎切歯部に定型的過剰歯の症例を経験したので文献的考察を加え報告した。

(本論文の要旨は昭和58年11月26日岩手医科大学歯学会第9回総会において発表した。)

Abstract : In a 19-year-old female, we found a supernumerary permanent tooth, a mandibular incisor, with a fully developed clinical crown. It was located on the dental arch, between the right lower central incisor and the canine. A periapical radiograph revealed a fully developed root.

文 献

- 1) 佐藤峰雄：邦人に於ける歯数異常の研究，日歯会誌，30：23-41，77-104，1937.
- 2) 馬朝 茂：日本人の歯における形態的及び数的異常の統計的観察，歯科学雑誌，6：248-256，1949.
- 3) Stafne, E. C. : Supernumerary teeth. Dent. Cosmos. 74：653-659，1932.
- 4) 藤田恒太郎：人における歯数の異常，口病誌，25：97-106，1958.
- 5) 今村 汎：人類下顎過剰歯に就て，歯科学報，31：375-376，1926.
- 6) 脇屋和夫：下顎に発現せる過剰歯(追加歯，円錐歯，双胎歯)の三症例，臨床歯科，12：344-353，1940.
- 7) 岡本 治，齊藤光正，今井 悟，藤川政男，秋庭美津男，岸田 実：下顎における過剰歯16症例について，歯科学報，63：552-558，1963.

- 8) 川島 進：先天性の歯数異常に因る不正咬合の種々相，日矯歯誌，5：1-12，1936.
- 9) 住谷 靖：日本人における歯の異常の統計的観察，人類誌，67：215-233，1959.
- 10) 阿保喜七郎：下顎前歯部に発現せし比較的稀なる過剰歯の観察，歯科学報，46：972-977，1941.
- 11) 小椋 正，野村光次：下顎切歯部に発現した過剰歯の1例，小児歯誌，6：86-89，1968.
- 12) 沢秀一郎，山崎 修，古沢 寛，花田晃治，福原達郎：いわゆる下顎5切歯(Five incisors)の4例について，口科誌，27：74-82，1978.
- 13) 多田 逸，藤田耕二，塚元利雄：下顎前歯部に認められた過剰歯の1例，歯科医学，43：277-284，1980.
- 14) 楠 国雄：人類下顎過剰歯ノ二例ニ就イテ，朝鮮之歯界，2：71-73，1931.
- 15) 松本一男：人類ノ過剰歯ニ就テ，朝鮮歯科医学会雑誌，9：2：7-18，1933.

- 16) 松村 晋: 下顎截歯々列内ニ発現セル過剰歯二例, 台湾歯科月報, 75 : 1-7, 1934.
- 17) 宇賀春雄: 邦人截歯部ニ發生セル過剰歯四十二例, 日歯会誌, 27 : 726-735, 1934.
- 18) 遠藤至六郎: 新編口腔外科診断学, 第6版, 文光堂, 東京, 427, 656-658, 1948.
- 19) 東郷満輔, 平川正輝: 稀有なる下顎切歯部過剰歯の1例, 九州歯科学報, 4 : 10-13, 1940.
- 20) 岸本 正, 木下善之助: 上下顎向中切歯間に相対的に現われた稀有なる過剰歯の1例, 歯科医学, 15 : 93-98, 1952.
- 21) 今井 茂, 門脇 清: 下顎に於ける6切歯の1例, 北海道歯会誌, 7 : 40-41, 1952.
- 22) 服部左門: 過剰歯, 欠歯, 癒合歯, 矮小歯などの進化学的考察, 歯科学報, 59 : 1124-1137, 1959.
- 23) 吉岡敏雄, 小林 茂: 下顎前歯部に発生した過剰歯の1例, 歯界展望, 17 : 894-895, 1960.
- 24) 山崎 裕: 切歯部の過剰歯が家族の5名に現われた1例, 口病誌, 28 : 105-109, 1961.
- 25) 尾崎 公: 歯数の異常, 歯界展望, 27 : 1-8, 1966.
- 26) 山野智要之亮, 山内和夫, 河底晴一, 松田征雄, 山崎喜充: 矯正患者にみられた歯数の異常, 1過剰歯について, 広大歯誌, 1 : 50-53, 1969.
- 27) 白川正順, 宇沢俊一, 鎮目正美, 和田 寛, 関口洋介, 佐藤クレイトン: 歯列内に萌出せる上顎側切歯ならびに下顎正中過剰歯各2例について, 慈医誌, 94 : 662-665, 1979.
- 28) 金子昌幸, 小暮法次, 五十嵐秀志, 中村良司, 古本啓一: 下顎に見られた過剰側切歯の1例, 歯学, 67 : 856-861, 1980.
- 29) 五十嵐東, 笹川一郎, 森 秀樹, 吉岡敏雄: 上・下顎切歯部の定型的形態の過剰歯の5例, 歯学, 68 : 90-99, 1980.
- 30) 岡本 治, 岡本日出夫: 写真で見る歯の形態と萌出の異常, 第1版, 医歯薬出版, 東京, 440-443, 1981.
- 31) 大橋平治郎: 人類ニ於ケル歯数過剰ノ知見補遺, 台湾歯科月報, 50 : 1-27, 1932.
- 32) 江沢 清: 稀有ナル下顎埋伏過剰歯ノ数例, 口病誌, 11 : 443-447, 1937.
- 33) 福島玄一: 下顎前歯部に発現せる過剰歯の症例, 大日本歯科医学会誌, 86 : 249-254, 1937.
- 34) 今村 汎: 人類過剰歯ノ二十四例ニ就テ, 満鮮之歯界, 8 : 456-465, 1939.
- 35) 上尾 登: 癩患者に観たる稀有なる歯牙異常の三症例, 臨床歯科, 13 : 404-415, 1941.
- 36) 山田 茂: 歯数並に形態の異常が歯列, 咬合に及ぼす影響に就テ, 臨床歯科, 13 : 160-183, 1941.
- 37) 藤田宗次: 学童の過剰歯について, 人類学・人類遺伝学・体質学論文集, 20冊, 125-129, 1953.
- 38) 栃原 博: 稀有なる乳歯過剰歯の1例, そして夫れの長期観察, 歯科学報, 56 : 408-412, 1956.
- 39) 小林茂夫, 金子勝男, 茂木知文: 過剰歯数の4例について, 口病誌, 25 : 663-664, 1958.
- 40) 中村忠文, 毛利 彊, 森 宏, 谷口博通: 下顎左側側切歯と犬歯中間の舌側に発現した矮小過剰歯の1症例, 歯科医学, 31 : 289-292, 1968.
- 41) 花岡 宏, 山内和夫, 河底晴一, 今田義孝: 矯正患者にみられた歯数の異常, III. 歯列への影響に関して, 日矯歯誌, 31 : 162-167, 1972.
- 42) 長縄弘康, 佐々公人, 村田格一, 長坂信夫: 下顎前歯部における埋伏過剰歯の2症例, 小児歯誌, 13 : 260-265, 1975.
- 43) 原田吉通, 秋吉興一, 馬場博史: 下顎前歯部両側性に現われた乳歯過剰歯の1例, 九州歯会誌, 28 : 427-430, 1974.
- 44) 荻田修二, 渡辺美津子, 松村 祐, 長坂信夫: 乳歯列における双生歯の2症例, 小児歯誌, 16 : 487-495, 1978.
- 45) 平岡弘士, 香西克之, 西尾明子, 長坂信夫: 後継歯を伴う下顎乳歯過剰歯の1例, 小児歯誌, 20 : 633-641, 1982.
- 46) 齊藤利世: 永久歯の前歯部における癒合歯について, 歯界展望, 16 : 685-692, 1959.
- 47) 吉岡玄一: 下顎に発生せる稀有なる癒合過剰歯の1例, 臨床歯科, 13 : 1392-1393, 1941.
- 48) 相田孝信: 下顎永久歯列に現われた双生歯の1例, 日歯評論, 192 : 7-8, 1958.
- 49) 吉本二郎: 下顎前歯部に現われた双胎歯の1例, 歯界展望, 16 : 85-88, 1959.
- 50) 萩原 泉: 下顎前歯部に埋伏した2個の矮小過剰歯の1症例, 歯科学報, 64 : 449-451, 1964.
- 51) 堀井正雄: 群生せる過剰歯の1例, 歯科学雑誌, 8 : 328-330, 1952.
- 52) 椿本九美夫, 田中 広, 栗岡博良: 群生矮小過剰歯を有する3症例について, 歯科医学, 28 : 568-573, 1965.
- 53) 平川英明, 寺坂修治: 下顎正中埋伏過剰歯と左側下顎中切歯が共存する, 歯原性線維腫の1例, 小児歯誌, 20 : 322, 1982.
- 54) Bolk, L. : Supernumerary teeth in the molar region in man. Dent. Cosmos. 56 : 154-167, 1914.
- 55) 藤田恒太郎: 哺乳類とくに人類の歯の系統発生, 解剖誌, 33 : 89-94, 1958.
- 56) Bush : 野坂より引用.
- 57) 野坂洋一郎, 伊藤一三, 菅原教修: 下顎小白歯部に対称的に過剰歯の出現した2例ならびに文献的考察, 口科誌, 25 : 296-324, 1976.
- 58) Moss, M. L. : Phylogeny and comparative anatomy of oral ectodermal-ectomesenchymal inductive interactions. J. Dent. Res. 48 : 732-737, 1969.
- 59) 中村正義: 歯数過剰と歯数不足とを共に有する1家系の歯科的遺伝学的観察, 口科誌, 7 : 199-216, 1958.
- 60) 深田英郎, 岩堀 久: 一卵性双生児の双方にみられた過剰歯, 日矯歯誌, 16 : 54-56, 1957.
- 61) 吉本二郎: 第1小白歯の前方に出現した下顎第3小白歯の1例, 歯界展望, 16 : 800-802, 1959.
- 62) 石川富士郎, 遠藤 孝, 龜谷哲也, 柳沢 融: 上顎前歯部における過剰歯の統計的観察, 口科誌, 16 : 293-302, 1967.